

海外調査団を組織して - こぼれ話 -

藤本正男

Sketches of Investigative Group Tour to Europe

Masao Fujimoto

1. プロローグ

6年にわたる自動車技術会・構造形成専門委員会の共同研究の貴重な成果を携えて、地球環境への社会的技術対応の進んだヨーロッパ、特に、スウェーデンとドイツをまわり、議論してきました。日程は、1999年9月11日出発、19日帰国の9日間でした。

調査団メンバーは14名で、委員長の役目柄、筆者が団長を務めることになり、その内訳は、自動車関連7名、鉄鋼関連3名、大学関連4名の構成でした。実は、ますますの不況による引き締めの折から、委員会委員の半数の参加による代表団の組織は、各位の精一杯のご協力を得て、ようやく構成することが出来たのです。当初は、参加者が決まらず、内心では幾度give upを覚悟したかしれません。

2. 豹変したアポイントメント

この1～2年の間に、自動車業界には激変が起っていました。例えば、Ford社、Daimler社の関連などです。委員の中で、最もパイプの太いルートを通して、Volvo社、VW社、Daimler-Chrysler社、BMW社の各位にアプローチし、お願いをしていましたが、訪問のアポイントメントが定まらず、日程の二転三転に大変な苦勞をしました。

結局、Volvo社系列のスカンジナビア環境研究所とBMW社のリサイクルセンターのみOKという無残な状況でした。しかし、知人、友人のパイプのお陰と、強力なツールであるE-mailのお陰で、出発ぎりぎりまで、先方とのスケジュールの調整ができ、本当に救われました。



写真1 スウェーデン・イエテボリの港を展望しての調査団の皆さん
(湾内と運河を遊覧の後、筆者は、前列中央)



写真2 プレゼンテーションの準備情景
(持参のパソコン接続など、開始前は互いのテストで右往左往して忙しい。どこでも、ソフトは米国製、プロジェクターは日本製の組み合わせパターンでした。)

まず、ある試験システムメーカーの方々に大変お世話になりました。行程中のホテルや会議室の確保から、特別セミナーと見学の設定、さらにディナー招待と、親身のサポートをいただき、今回の調査が実行できたのは、このお陰といっても過言ではなく、感謝しています。

さらに、ドイツ自動車技術会 (VDI - FVT) の車体技術関連の委員長と、急遽コンタクトすることができました。E-mailを通して日独委員会の合同コンファレンスを開く計画がまとまり、Agendaも確認し合うことができました。設定日は9月15日、折しもフランクフルトでは、国際モーターショーのPress dayでした。お陰で各メーカーの技術者(12名)が参集でき、モーターショー隣接のMarriott Hotelの立派な一室で、先方から1件、当方3件のプレゼンテーションを行い、意見交換することができました。この日独会議は、自動車技術会でも初めての事でしたが、身にしみて感じたのは、やはり英語力の重要さでした。

3. スエーデン・イエテボリ

清楚という言葉がぴったりの健康的でゆったりした感じのよい街でした。人口45万人で、スエーデン第2の都市。港とVolvo車で栄えています。人も少ないので、街にはゴミがなく、清潔で、かえ



写真3 ゲーテが「ファウスト」や「若きヴェルテルの悩み」などを執筆したという(フランクフルト・ゲーテハウス博物館の4階書斎にきれいに保存されていました。)

ってさびしさを感じるくらいでした。福祉に厚い代わりに、若い人でも、収入の半分が税金。でも、文句は言わず、老後の安心を期待しているそうです。自動車道路にはヒーターが埋め込まれ、凍結防止など、インフラも充実。しかし、安い電気代の原発は、廃止の方向も聞きました。

訪問した環境研究所 (Assess) は、精鋭5人でも、ヨーロッパの環境Standard、ひいてはISOに対して強い影響力を与えており、日本からのさらなる寄与の大切さを感じました。

4. ひどいマンハイムのホテル

有名なHeidelbergは混んでいるからと、隣町Mannheimerのホテルを旅行社が予約してくれていました。ここで、一騒動が起こったのです。部屋に入ってみると、とっても狭く、シングルにエキストラベッドで二人泊れというのです。当然ヨーロッパの広いツインを期待していましたので、皆が怒り出しました。添乗員さんは、それまでもよく支援してくれていましたが、ここで彼の大交渉が始まりました。最後は我々も巻き添えになり、結局、各人好きな飲み物2杯とフルーツで我慢することにし、筆者がホテルのマネジャーと握手して決着しました。お陰で4枚目の写真ができました



写真4 Mannheimerのホテル中庭での楽しい?ひととき
(抗議の代償として得た飲み物とフルーツを楽しんで、その夜のシングルにエキストラベッドという悪条件を忘れようとしているところ)

た。その夜の寝心地がどうだったか、皆さんからの感想は、もう聞きませんでした。

5. 長いディナ パーティ

試験システムメーカーさんの招待で、昔の貴族の狩猟用別荘を改装したレストランで夕食をご馳走になりました。はじめ、午後7時のまだ明るい前庭で、食前酒片手の懇談から始まり、馬の厩舎だったというパーティー会場では、スピーチの交換も何とか済み、各テーブルでは話に花が咲いて、おいしい料理とワインを楽しみました。しかし、いつまで経っても終わる気配がないのです。時計は10時半を過ぎ、疲れを感じ出したとき、相手方の2,3人のかたが、席を立て、お先にと帰っていきました。そろそろ我々もと思っていたところ、隣にいるホストから、先に帰るのはドイツでは少しも失礼ではないので、皆さんはごゆっくりというので、帰りたいともいえないまま、11時が過ぎ、結局、お開きとなったのは、11時半近くでした。始まる前に、メーカーさんのアテンドして下さった日本人の方が、今夜は遅くなりそうですよと独り言のように言っておられたのを思い出しながら

ら、また、こんなに遅くまで対応いただいたホストの方々に感謝しつつ、ようやくホテルへ帰り着きました。

6. エピローグ

でも、全行程事故もなく、直前になって詳細を決定した計画の通りに、プレゼンテーションと討議をこなし、いくつかの見学もし、さらにヨーロッパの文化に直に触れる機会を得ることができました。準備の苦労はあったものの、このように、大変幸運な海外調査が実行できましたのは、関係各位のご協力のお陰であり、この場を借りて、心からお礼申し上げます。

また、ミシガン大学の菊池昇教授（当時、当社・理事）には、プレゼンテーション技術など多くのアドバイスをいただきました。お陰で自信を持って対応することが出来、感謝しています。

なお、この調査結果は、2000年4月19日、東京お茶の水・化学会館にて自動車技術会シンポジウムを開催し、技術的な成果について、ご報告させていただく予定にしています。以上。

(1999年12月9原稿受付)